

地中海と地中海世界

齊藤寛海

本稿は、2001年7月1日に沖縄県立芸術大学で開催された、第25回「地中海学会大会」のシンポジウム「海のネットワーク」における、筆者の報告内容の一部に大幅に加筆、修正したものであり、報告とはちがう構成になっている。パネリストは、豊見山和行氏(琉球王国史、琉球大学)、濱下武志氏(東・東南アジアネットワーク史、京都大学)、筆者の三人であり、司会者は、高山博氏(西洋中世史、東京大学)だった。関係者のみならず、貴重なご意見、ご質問をくださったフロアの方々にも、ここで感謝の意を表する。

1 歴史研究の視点

沖縄への視点について、濱下武志は、次のようにいう(文献1)。本土(ヤマト)の知識人は、共通して「日本の一部としての沖縄の過不足を」みてきたが、沖縄の知識人は、世代とともに研究対象を変えつつ、沖縄、沖縄人のアイデンティティの問題と格闘してきた。後者の一人、豊見山和行は、東シナ海・南シナ海に広がる海のネットワークをもった琉球王朝時代を研究し、その海洋性を強調するとともに、その内部世界をより構造的に認識しようとする。琉球王朝は、周知のように、中国を中心とする朝貢、冊封体制のなかに位置する一方で、薩摩藩、江戸幕府とも不平等な関係をもつにいたる。いずれにせよ、後者の視点から浮上したのは、「一つの県には閉じ込めることができない……琉球世界であり、沖縄世界」である。このような「強い地方主義の主張」は、地球化した現代では、もはや「中央」にはではなく、世界に対しておこなわれる。

これと同一の発想から、濱下武志は、アジアの近代について、次のようにいう(文献2)。従来の歴史観では、「西洋の衝撃」がアジア近代史の動因であり、アジアは、ヨーロッパのモデルを追求するだけの存在となり、歴史の「主動者」としての地位を喪失した、とされた。このヨーロッパ中心史観から脱却するには、アジアの近代と前近代との「連続性を検討し」、「アジア史の内的構造とその歴史展開の論理」を把握して、「アジアを能動態としてとらえ、そこにヨーロッパが参画するという構図」を描く必要がある。そのための方法として最近の研究動向、経済展開が指向するのは、「国家」というヨーロッパ的な空間認識に代えて、東アジアや東南アジアに存在した「広域地域秩序」を空間認識の基盤とすることである。この広域地域秩序は、ここでは「海域」という観点から把握できるが、海域とは、「海が陸をかたちづくり条件づけているとする」とらえ方であり……陸地をも組み込んだ空間である。この視点により、「陸地を基礎とした国家の歴史」だった従来のアジア史像に代わり、海域を基礎とした広域地域秩序の歴史として「移動と交流のアジア史像」、すなわち歴史の動因を内部にもつ開放的なアジア史像を描くことができる。この秩序が、ヨーロッパ勢力のアジアへの参入形態、琉球王朝の性格、東アジア全体の政治関係を規定したのである。

「陸からの、国家からの」視点から、「海からの、広域からの」視点に転換することで、琉球・沖縄史、東・東南アジア史では、新しい歴史像が出現する。この歴史像は、東アジアの交流拠点の一つとなることを目指している沖縄の、また最近のアジア経済の動向の規定要因を把握しようとするアジア諸国の、切実な要求にこたえようとするものでもある。

さて、筆者は、中世イタリアの歴史に関心をもっている。北部のヴェネツィア、フィレンツェのような都市国家の商人は、キリスト教圏のみならず、イスラーム圏の各地でも活躍した。中部の教皇領(国家)、南部・シチリア・サルデーニャの諸王国の政治史は、ヨーロッパや地中海という「広域地域」の枠組みのなかで考察しなければ、理解できない。また、フィレンツェや教皇領と神聖ローマ帝国、ヴェネツィアや南部とビザンツ帝国、シチリアと

ファーティマ朝という関係についていえば、政治秩序の「理念」はどうであれ、政治権力の「現実」はどうだったか、が歴史の展開を規定した。中世イタリアの諸国、地方の展開は、海のネットワークにせよ、海と陸のネットワークにせよ、中世や現代の国家を超えた視点からでなければ、理解できないのである(文献3)。海と陸という視点についていえば、ヴェネツィアは、地中海商業の重要な担い手だったが、本土に領域国家を形成してさまざまな内陸国家と対立抗争したので、その歴史を「海からの視点」だけで理解することはできない。また、オスマン・トルコは、地中海世界に大きな影響をあたえたが、その歴史もこの視点だけで理解することはできない、と思われる。中世イタリアの歴史のみならず、「地中海」と名付けられた海の歴史には、海からの視点と陸からの視点とを総合した、「海と陸からの視点」が必要なのである。そこでは、「国家」にとらわれない視点、「海と陸からの視点」は、あまりにも自明のことなので、多くの場合、あらためて意識されることがなかった。

沖縄、「アジア」の歴史研究と、中世イタリアの歴史研究とのこの視点の差は、なぜ出現したのか。筆者が研究しているヴェネツィア史、フィレンツェ史についていえば、それはイタリア人ではなく、ヴェネツィア人、フィレンツェ人によって研究されたのに対して、沖縄史は、日本人によって研究されたからである。ヴェネツィアやフィレンツェが国家としては存在しない現在でも、イタリアという国家にとらわれない、あるいはそれを無視した視点は、幸か不幸か健在である。中世イタリア史の研究者なら、ヴェネツィア史、フィレンツェ史、シチリア史、…はあるが、イタリア史はない、と思い、その是非に思いを巡らした経験があるはずである。現実にも目の前にあるイタリアという国家の領域が、中世にはどのようなありかたをしたのか、それを諸地方の有機的な関係において把握しようとしても、容易ではない。むしろ、中世イタリア史の構築が要請されている。歴史を国民国家の視点からしかみないのは不毛だが、国民国家が現実の意味をもつ限りにおいて、この視点を否定するのをもまた不毛であり、目的に応じた柔軟な視点が必要である。いずれにせよ、イタリア史が成立する以前に、ヴェネツィア史、フィレンツェ史、…が確立していたが、そこにはもともと「国民国家」という視点はない。琉球は、琉球王国が日本に併合されて沖縄県となる以前に、確立した琉球史をもっていたのだろうか。そして、「沖縄学の父」伊波普猷は、日本という視点を捨て切れずに、日本と沖縄に引き裂かれてしまった。

2 地中海と地中海世界

現在の地中海を取り巻く地形や自然環境は、大きくは大陸移動、小さくは最後の氷期の終焉により、ほぼ1万年前には形成された。その後、気候の微変動のような自然条件、狩猟採集から農耕牧畜への移行、それにとともなる人口増加のような社会条件の変化により、森林の減少など、自然環境の変化は現在までつづいている。さらに、人口移動などにとともなる栽培作物、家畜の種類の拡大は、各地の生活条件を変化させた。地中海の島嶼や周辺地域には、緯度(温帯・亜熱帯)、地形(山岳丘陵と海岸線が豊富)、気候(地中海性気候)、など共通の自然条件と、それに由来する共通の生態系があり、それが地中海式の農業、牧畜を通じて、住民の物質生活、日常生活にある程度の共通性をもたらした。また、狭隘かつ穏和な地中海自体の自然条件は、海上交通にとって障害というより、その手段となる性質をもつので、周辺地域は、人、物、情報の交流が比較的容易に実現するための客観的な条件をもつことになった。

とはいえ、それだけで、この地域の人々が相互に有機的な関係をもつ世界が、自動的に成立するわけではない。地中海の周辺は、三大陸それぞれの海辺でもあり、内陸に顔を向けるという側面をもつ。地中海周辺の地方は、海に顔を向ける、内陸に顔を向ける、両方に顔を向ける、という可能性をもつ。いつでもどこでも、顔は地中海だけに向いている、というわけではない。ダマスカスを首都としたウマイヤ朝は、東地中海の覇権をビザンツ帝国と争ったが、バグダッドに遷都したアッバース朝は、地中海への関心が薄かった(文献4)。10世紀以前のジェノヴァやピサは、地中海に背を向けていたし、12世紀以前のサルデーニャの原住民は、内に閉じ籠も

っていた。有機的な世界が成立するといっても、それは、経済、政治、文化のいずれの領域でも成立するし、複数の領域で重層的に成立することもある。また、地中海の内部で完結する側面も、完結せずに外部への通路となる側面もつ。その世界のありかたは、時代によって変化する。

これまで、地中海世界という言葉は、さまざまな文脈で使われてきた。市民共同体の分解と復元において固有の運動法則をもつ、弓削達の地中海世界は、ローマ市民共同体の運動法則によって成立した帝国の崩壊とともに5世紀に消滅する(文献5)。地中海内部の商品流通を前提として成立する、ピレンヌの地中海世界は、イスラームの進出によって8世紀に崩壊する(文献6)。周知の(地理的、社会的、事件的という)三種類の「時間」から構成される、ブローデルの地中海世界は、地中海とともに存在するようである。わが国では、以前より、アナル学派の業績が紹介されてきたが、最近、同派の重鎮ブローデルの『地中海』が邦訳された(文献7)。それを契機の一つにして、土地・国家中心史観、西欧中心史観に対する反省ないし批判をともないつつ、彼の地中海世界が、日本史、アジア史の研究者をふくむ、多くの歴史家たちによってあらためて検討されている。

では、地中海世界は、わが国の研究者たちによって、どのように取り扱われているのか。岩波講座(新版)『世界歴史』では、全28巻のうち、それを表題にするのは、第4巻「地中海世界と古典文明、前1500年—後4世紀」だけであり、以後の地中海周辺は、ヨーロッパとイスラーム世界に区分される(文献8)。このイスラーム世界は、マシュリクを中心にして、西方(マグリブ、シチリア、イベリアという地中海地域)よりは、東方、南方との結び付きに重点がある。ブローデルの影響の強い歴史学研究会編『地中海世界史』(全5巻、刊行中)(文献9)では、幾つかの歴史「分野とそれぞれの時代区分に分断されてきた、地中海世界の「古代から現代にいたる」通史が、イスラーム以前(第1巻)と以後(第2巻)に分けて扱われる。イスラーム以後の地中海世界は、西欧、ビザンツ、イスラームという三つの「世界」、すなわち「三文化圏が接触する世界でもあり」、「異質なものが錯綜しつつ共存する多様で複雑な歴史的空間」である、とされる。第3巻以下は個別テーマを扱うが、「地中海型」という類型で一律的な世界を描くことは求めない。このような類型化が有効なのか、という「問題自体が…提起されるだろう」(「刊行にあたって」)。地中海で培われた「一つの」文化伝統を基盤にして、地中海世界というイメージは幾つも形成されたが、加藤博によれば、それは「実態のともなわない幻想であるかもしれない」(第3巻「序」)。また、「古代地中海世界」を扱う第1巻の「序」で、森谷公俊一は、古代史の研究者には、「ローマ帝国の崩壊は地中海世界の消滅と同義であるかのように」みえる、という。この巻の課題は、「古代史」研究の成果をふまえて、周辺の国家・地域・民族の「個性」を把握し、それがどのように地中海世界の「普遍性」に繋がるのか、を明確にすることなのである。この普遍性は、中世以降にも妥当する普遍性なのだろうか。いずれにせよ、ここでは、それ自体としては検討対象にしないブローデルの「地理的時間」、すなわち多少とも共通する地理的条件をのぞけば、「地中海世界」の通時的構造について明確な認識があるわけではない。結局、地中海世界は、ブローデルがその基盤に地理をもちこんだ後でも、地理的な変化よりも速い時間で変化するもの、中世初期の過程で二つないし三つの文化圏に分裂するもの、として取り扱われている。

ところで、岸本美緒は、「東アジア世界」と「東南アジア世界」について、それぞれの特徴を次のように対比する(文献10)。「中国の影響のもとにある」東アジア世界は、「単一の中心をもつ政治秩序」と「文字・思想・宗教・制度の共通性」をもつ。他方、東南アジア世界は、気候・生態系が共通し、穏やかな海によって古来交流が頻繁だった結果、生活文化(衣食住、生活習慣)は「独特の共通の風貌」をもつが、「多重的な宗教分布、多様な政治文化、ゆるやかな社会統合、小規模な政治体の併存」という「一見したままとまりのなさ」が特徴をなす。したがって、それは「何をもって一つの『世界』と見なされるのか」が繰り返し議論されたが、「この地域としての歴史のなかに、地域としての固有性と自律性を発見してゆこうとする極めて意識的な問題関心」が存在した結果、世界としてみなされている。さて、ここで細部にこだわらなければ、「東アジア世界」を「古代地中海世界」に、「東南アジア世界」を「中世以降の地中海世界」に読み替えることができる、と思われる。古代地中海世界はおくと

して、中世以降の地中海世界は、現在の歴史認識の水準では、自明のものとして存在するのではなく、研究者の意識的な問題関心によって浮上する、というのが実態である。

ブローデルが刺激の一つとなって、関哲行がいうように、対立の構図で把握されてきたものが、共通の構図で把握されるようになり、理解が深化したものもある。たとえば、キリスト教、イスラームについて、聖人や聖地、巡礼および参詣が、共通の視点から考察されるようになり、それぞれの信仰の実態に対する理解が深化した(文献11)。しかし、ブローデルの地中海世界では、鈴木董がいうように、その広大な視野、豊饒な内容、独創性の陰で、個々の事件や社会構造に対して大きな影響力をもつ各地方間の「文化圏的差異性」、すなわち社会組織や価値体系などにおける差異が的確に把握されておらず、政治史がその世界の経済や社会、ないし生態系との関係において構造的に把握されず、事件史の水準に放置されている(文献12)。結局、ブローデルの地中海世界は、現実には一つの問題関心、ないし歴史意識以上のものとしては認識されていない。したがって、歴史現象をよりよく理解するためには、研究者個々の問題関心に基盤をおく、それぞれの地中海世界が提示されてよい。なお、濱下のいう「海から、広域からの」視点は、(とりわけ近代の)東アジア・東南アジアという広域地域を一つの世界として把握するために、ブローデルの歴史意識に触発されて、濱下自身が構想したものである、と思われる。

中世以降の地中海世界について、筆者は、地中海の各地域間における物資の授受関係、とりわけ商業にもとづく授受関係によって有機的な関係をもつ世界として把握し、この世界の展開を概観してみたい。とはいえ、これまで筆者が研究したのは、中世後期・近世初期にイタリア人をおもな担い手としておこなわれた商業であり、またこの時代が地中海商業の黄金時代だったと思われるので、それに焦点をあわせて概観する。

3 地中海世界の展開

1) 中世後期以前

地中海における商業は、地中海を取り巻く政治勢力の変化に規定されて変化するという視点から、高山博は、1100年頃までの動態については、おもに[ビザンツ帝国の役割を重視する]レーウイスに依拠して、大略次のようにいう(文献13)。ローマ帝国の政治中心の西から東への移動、西帝国の政治混乱にともない、東地中海(バルカン・アナトリア、シリア・エジプト)の商業は活発だったが、西地中海の商業は衰退した。東(ビザンツ)帝国が、西地中海沿岸の大部分を再征服すると、東地中海の商人は、西地中海とも取り引きするようになった。ムスリムの大征服後、地中海はキリスト教圏とイスラーム圏に分裂し、前者は西欧圏とビザンツ圏に乖離した。ビザンツ帝国は、地中海での優位は保持したが、ほかの勢力の海上活動を制御できなくなった。やがて、イスラーム圏ではイラクを中心に経済が発展し、その刺激のもとにマシュリクからマグリブをへてイベリアにいたるキャラバン・ルートが開発された。海上商業は、政治的な対立と分裂によって全体として衰退したが、とりわけ西欧圏に面する西地中海の北岸周辺では衰退が顕著だった。次いで、ビザンツ帝国の支配地域が縮小すると、エーゲ海と黒海に限られたその海上商業は、自給自足的なものになった。西欧の海上商業は、沈滞したままだった。一方、ムスリムは、バレアレス、コルシカ、サルデーニャ、シチリア、クレタ、キプロスを獲得し、9-10世紀には、その海上覇権が成立した。ムスリムは地中海商業とインド洋商業を結合したが、活発になった経済により、地中海のイスラーム圏では、カイロ、マフディーア(チュニジア)、フェス(モロッコ)、コルドバのような都市が繁栄した。しかし、この地域全体を統合する政治権力はなく、勢力を回復したビザンツ帝国と、イタリア海港都市およびノルマン人とにより、その海上覇権は崩壊していく。やがて、[東方の内陸国家との戦争で国力を消耗した]ビザンツ帝国は、海上から撤退し、イタリア海港都市、すなわち西欧が海上覇権をもつ時代となる。

西欧の進出以前の時代について、このようにビザンツ帝国の役割を重視するか、あるいは「アラブの大征

服」後の地中海は「イスラームの海」になったとするか、異説はあるが、地中海商業は周辺の政治状況に規定されていた、そして西欧の商業は沈滞していた、とするのは共通の見解だといってよい。さて、11世紀には、西欧は地中海に進出したが、地中海商業はまだムスリムの手中にあり、西欧人は商人としてまだ洗練されてはいなかった(文献14)。ムスリムのキリスト教圏、とりわけ西欧に対する関心は、逆方向の関心より、はるかに低かった。西欧が「不毛の土地」であり、宗教的な不寛容によって居住、旅行が禁止されたり、不便だったことが理由である。ムスリムが西欧人に対してもつイメージは、愚鈍、粗暴、獸的、残酷、不潔というものであり、直接接触する機会がふえた十字軍時代にも、基本的には変化しなかった(文献15)。

9-12世紀の間、ないし「11世紀中葉」に「東地中海周辺」で活躍したムスリム「商人」(「」内は推定)アリー・アル・ディマシュキー(ダマスクス人アリー)は、現存最古の商業書『商業の美』で実用的な知識を体系的に記述した(文献16、17)。商業、商人、富裕を礼賛する同書は、商品学的部分と商業学的部分に二分されるが、両者に溶け込んだ形で、経済理論的部分と教訓的部分がある。貨幣の出現と機能について、高度な理論的考察をしている。商品の記述は、奢侈品が多く、日常製品、食糧・原料が少ない。商人は、「遍歴商人」、「貯蔵商人」、各地に商品の売買を委託する代理人をおく定着商人、あるいは問屋制手工業の経営者である「大商人」の三種に区分している。イスラーム商業の水準についての証言である。

10世紀後半、マシュリクの商業網の中心が、バグダッドからファーティマ朝のカイロに移動した。ユダヤ人は、イラクから、また同様に政情不安のマグリブからもエジプトに移動したが、彼らの活動を記録したカイロ・ゲニザ文書は、11、12世紀のものが多く、当時の地中海、インド洋商業の貴重な史料となる(文献18)。そこには、帳簿、売買契約書、商品の注文状や送り状、などもある。地中海では、イスラーム圏の各地(イベリア、シチリア、マグリブ、マシュリク)との間で、代理人、ないし大商人の場合には自社の支店や駐在人により、多様な商品(奢侈品、香辛料、繊維製品、日用雑貨、書籍、鉱産物)が取引されている。キリスト教圏との取引については、あまり記録がないらしい。遍歴商人は、イタリアのコンメンダ契約と同様のキーロード契約により、出資者と企業を組織した。11世紀が、地中海では、ユダヤ人の商業の絶頂期だった。ちなみに、ユダヤ人は、異教徒に寛大なイスラーム世界で、その世界の構成員として商業に従事し、10世紀前半には、ペルシア湾から広東にまで進出していた。

12世紀の過程で、地中海商業の主役が、ユダヤ・ムスリム商人から、南西欧の商人に交代した。ユダヤ商人も、ジェノヴァやピサの船を利用するようになった。西欧の人口は、すでに中世農業革命を契機に増加していたが、マグリブ、マシュリク、アナトリア、バルカンの人口には、そのような増加がなかった(文献19)。いずれにせよ、11世紀以降、西欧人の非西欧への進出が活発になっていた。イベリアでは、レコンキスタ。イタリアでは、ピサ、ジェノヴァ、ヴェネツィアの海上進出、およびノルマン人によるビザンツ領、ムスリム領の征服。東地中海では、弱化したビザンツ帝国の援助要請を契機とする、第一回十字軍遠征。地中海商業の主役となった海港都市には、共通の特徴がある。都市国家である、あるいはアラゴン(連合)王国の都市バルセローナの場合は、強力な自治権をもつ都市であることにより、商人の利害が優先されたこと。多少とも全西歐的な軍事進出が背景にあり、それと互惠関係にあったこと。後背地として発展する社会、すなわち拡大する市場をもったこと。イスラーム世界、ないしビザンツ帝国から商業、海運の先進技術を摂取したこと。

13世紀には、地中海商業の主役が確定した。ヴェネツィアとジェノヴァは、十字軍遠征を契機に勢力を伸張し、その存在なしには、ビザンツ帝国の崩壊も、回復も実現しなかった。バルセローナは、アラゴン王権と連携して、西地中海に進出した。教皇と神聖ローマ皇帝(兼シチリア国王)との闘争の結果、両者とも権力を喪失したのみならず、この闘争を直接間接の契機として、シチリア王国は分裂し、ピサは没落した。マグリブのムスリムは、ムワッヒド朝の後退後、以前の勢力を喪失した。マシュリクのマムルーク朝は、モンゴルを撃退し、十字軍国家を放逐したが、内陸勢力(イル・ハン国、さらにはティムール朝、オスマン・トルコ)との抗争により、地中

海に進出する余力がなかった。ビザンツ帝国の弱体化、マムルーク朝の内陸勢力との抗争、シチリア王国の分裂、ムワッヒド朝の滅亡の間隙をついて、ヴェネツィア、ジェノヴァ、バルセローナの勢力が伸張したのである。

イスラーム世界は、海運だけではなく、商業や工業でも没落した。イスラエルの歴史家アシュトールは、次のようにいった(文献20)。11、12世紀には、エジプト、チュニジアの活発な毛織物工業は、製品の一部を南欧にも輸出した。十字軍時代以降、西欧毛織物がレヴァントへ輸出され、14世紀末以降、安い毛織物が大量に輸出されたので、現地の毛織物工業、および繊維工業一般が衰退した。ここでは、マムルーク権力による重税や財産没収のために私企業が没落し、また特権企業による独占体制が技術水準の低下をまねいたので、西欧の製品には対抗できなくなったのである。良質綿の産地シリアは、綿工業が衰退し、14世紀中葉以降、西欧綿工業への原綿供給地に転化した。このような逆転現象は、繊維工業だけにはとどまらない。アシュトール・テーゼというにふさわしい内容である。

2) 中世後期・近世初期の政治

14世紀には、地中海商業の主役が、黒海や大西洋・北海を自己の商業網に巻き込んでいた(以下、文献21)。ヴェネツィアは、第4回十字軍とともにビザンツ帝国を分割し、東地中海に一連の植民地をもった。ジェノヴァは、ビザンツ帝国の復興を支援し、東地中海から黒海にかけて勢力を伸ばした。ここに、ヴェネツィアとジェノヴァは、対立関係に入る。ラテン帝国以来ラテン(西欧)人に黒海が解放され、「モンゴルの平和」がその東半を包摂すると、十字軍国家が放逐されたレヴァントに代わり、黒海がイタリア商人の重要な活躍舞台となった。アラゴン連合王国のバルセローナは、王権と連携して海上商業に進出した。連合王国は、諸地域の緩い連合体だったが、レコンキスタによりバレアレスを獲得し、さらに「シチリアの晩祷」を契機に、シチリア、サルデーニャにも進出した。バルセローナは、西地中海でジェノヴァと対立して、ヴェネツィアと同盟し、東地中海にも進出したが、15世紀中葉には内部抗争などによって衰退した。13世紀末には、キリスト教徒がジブラルタル海峡を制覇したので、地中海の船、とりわけ「地中海商品」(葡萄酒、明礬)のみならず、「東方商品」(胡椒)をも積荷とする、ヴェネツィアやジェノヴァの船が、北海まで航海するようになった。西欧の辺地だったポルトガルは、その刺激のもとに商品作物を栽培し、海上にも進出した結果、14世紀末には商業利害を基盤とする政権が成立し、15世紀には既存勢力のないアフリカ西岸に進出する。

ヴェネツィアは、ダルマツィア沿岸、ギリシア周辺諸島、クレタ、(後には)キプロス、など、一連の海外領土をもつ植民地帝国だった。ジェノヴァは、コルシカ、サルデーニャ北部を支配し、エーゲ海北部、クリミアに植民地をもった。バルセローナは、シチリア、サルデーニャ、バルカンなど、連合王国の海外領土、勢力圏と取引した。いずれも、そこを商業、海運の拠点としたのみならず、農業、鉱業にも進出して需要のある商品を生産した。内陸都市フィレンツェも、地中海商業で活躍した。その商人は、教皇の徴税人として北西欧に進出して、国王や領主へ融資し、見返りに商業特権をもらい、そこで商業基盤を確立した。一方、分裂後のシチリア王国やナポリ王国にも進出し、同様に商業特権をえて、食料・原料を輸入し、製品を輸出する構造を創出し、それらを「経済的な植民地」とした。フィレンツェは、海港都市の海運を利用して、羊毛をイギリス、西地中海から輸入し、毛織物を地中海各地に輸出した。ロンバルディーアでも、類似の経済構造をもつ都市は多く、地中海商業は、内陸都市をも巻き込んだのである。

15世紀には、主役を取り巻く状況が変化した。トルコは、コンスタンティノープルを奪取してビザンツ帝国にとどめを刺し、バルカンをさらに北上する一方で、エーゲ海北部、ギリシア、アナトリア南部を征服した。ジェノヴァは、これに対応して、15世紀中葉以降、東地中海から撤退し、イベリアとの結合を強化して、西地中海および大西洋との商業に活路を見出した。コロンブスこそ、まさに時代の子である。ヴェネツィアは、守勢に転じながら、東地中海の領土を防衛し、マムルーク朝との商業を維持した。16世紀になると、トルコは、シリア、エジプトを征服し、同世紀中葉にはアフリカ北岸をアルジェリアまで支配した。地中海周辺は、まさにその3/4がト

ルコの直接間接の支配下に入った。とはいえ、地中海内部の縦軸と横軸、すなわちイタリア半島と、バレアス、サルデーニャ、シチリア、マルタ、クレタ、キプロス(1573、喪失)とは、キリスト教徒(スペイン、ヴェネツィア、など)の支配下にあった。トルコが海面の3/4を支配したわけではない。

競合する南西欧の都市国家、自治都市の時代から、対立するスペイン(1479年にアラゴンとカスティールが連合)、トルコ両帝国の時代への変化は、地中海商業の担い手に変化をもたらした。トルコの支配領域が拡大するにしたがい、トルコとに敵対する都市国家、とりわけヴェネツィアは、取引市場を縮小せざるをえない。反対に、ヴェネツィアに抑圧されてきたアドリア海の都市国家ラゲーザ(ドゥブロヴニク)と、それと連携する対岸の自治都市アンコーナ(教皇領)が、トルコの直接間接の保護のもとに、地中海商業でヴェネツィアと競合するまでに成長した(文献22)。インド洋におけるポルトガルの商業独占が崩壊し、胡椒の半分が東地中海に復帰したとき、もはやヴェネツィアにはそれを独占する力がなかった。ヴェネツィアがトルコと戦争するたびに、ラゲーザの関税収入は急増したのである。17世紀になると、大西洋ではスペイン、ポルトガルと対立してこれを駆逐し、また地中海ではトルコと友好関係を樹立した、イギリス、フランス、オランダが、トルコ領域との商業における主役となった。新しい主役は、いずれもトルコ市場で需要のある安価な毛織物を供給し、その船による輸送費用はイタリア船より有利だった。イタリアの旧式の毛織物工業と海運がは没落し、新しい主役の航路から外れたラゲーザ、アンコーナも衰退する一方で、マルセーユのみならず、寄港地となったリヴォルノ(トスカーナ大公国)が発展した。

3) 中世後期・近世初期の経済

13世紀末から14世紀初めにかけて、地中海商業は大きく発展した。従来の三角帆の小型帆船、(櫂と三角帆をもつ)ガレー船に加えて、北海から導入された四角帆の大型帆船(コグ船)、拡幅によって積載量を拡大したガレー商船が登場した。積み荷の種類、目的地の遠近に合わせて、用船の選択が可能になった。ちなみに、大西洋航海の進展に並行して、15世紀中葉以降、三角帆と四角帆を組み合わせ、ガレー船に近い高度の操縦性をもつ混装帆船(コロンブスの船)が出現する。コグ船やガレー商船の登場に前後して、イスラーム圏から導入された羅針盤が実用化され、ポルトラーノ(海図、海誌)が作成された。羅針盤は曇天での航海を可能にし、ポルトラーノは海路の知識を普及させ、航海しうる時間と空間を拡大した。同時に、商業のありかたが、遍歴商業から定着商業に変化した。商人は、通信文書と各種帳簿によって、同時に複数の市場と取引をすることが可能になった。さらに、海上保険が誕生して、海上商業の危険を多少とも軽減した。海運と商業が発展したのにともない、14世紀の過程で、海上輸送料金が絶対的に低下したのみならず、そのありかたが「従量的な体系」から「従価的な体系」に変化した。その結果、食糧や原料など低価重量商品の輸送が活発となり、取引品目の構成が大きく変化した。

14世紀中葉にフィレンツェ商人ペゴロッチが編纂した商業書『商業実務』には、地中海で取引される商品として、小麦、葡萄酒、オリーブ油、オレンジ、塩漬魚、塩、砂糖、羊毛、綿、明礬、毛織物、石鹼、紙、硝酸カリウム、タール、銅、錫、鉛、胡椒、生糸、真珠、象牙、琥珀、など、200種類以上がある。日用品から特殊物資まで、低価重量商品から高価軽量商品まで、地中海内部の産物から外部(インド洋、北欧、など)の産物まで、実に多種多様である(文献23)。地中海(およびその延長としての黒海、大西洋の一部)で生産され、その内部で消費されるもの(小麦、羊毛、など)。地中海で生産され、その一部が北西欧で消費されるもの(葡萄酒、オリーブ油、明礬、など)。外部から輸送され、かなりの部分が地中海で消費されて、残りが外部に再輸出されるもの(胡椒、琥珀、など)。ロンドンでは、地中海との取引で重要なのは、羊毛、毛織物と胡椒、絹との交換かもしれない。しかし、ヴェネツィアでは、輸入するのは、胡椒だけではなく、住民の日常生活を支える小麦、葡萄酒、塩、後背地の工業を支える羊毛、綿、明礬である。パレルモでは、小麦と毛織物の交換である。

商品と同様、地中海の市場も多様だった。強力な海運、広範な商業網をもつ、ヴェネツィアのような海港都

市だけが市場だったわけではない。海運をもたず、外部の海運を利用する都市(フィレンツェ)、それを受容する都市(アンコーナ)もある。事実上の国際通貨を発行する都市も、しない都市もある。各種の商品を扱う市場も、特定の商品だけを扱う市場もある。取引相手の範囲が広い市場も、狭い市場もある。ヴェネツィアには、取引が一段と活発になる冬と夏、すなわち「大市の季節」があった。ガレー商船団が航海途上にある季節ではなく、帰港し、再び出港するまでの期間、換言すれば積荷となる高価な輸入商品が販売される一方で、輸出商品が購入される期間である。小麦、葡萄酒、羊毛の購入市場には、収穫の季節と関連する取引のリズムがあった。ダマスクスやアレクサンドリアには、キャラバンの到着、出発と関連するリズムがあり、キャラバンの往復は、季節風と関連するインド洋商業のリズムと連動していた。胡椒の流通に着目すれば、ダマスクスへのキャラバンの到着、その外港バイルートからヴェネツィアへの出航、ヴェネツィアへの帰港、ヴェネツィアからロンドンへの出航について、連続するリズムが想定される。

胡椒が東西商業の商品だとすれば、小麦は南北商業の商品だった。フィレンツェは、シチリア、イタリア南部、などの小麦を恒常的に輸入した。人口の一部が海外の小麦に依存する一方で、周辺の農村は、小麦よりも収益のよい葡萄、オリーブ、などに作付を転換したようである。フィレンツェでは、基幹産業である毛織物工業への原料供給、住民への食糧供給は、いずれも地中海商業を前提とした。地中海商業は、内陸の都市や農村の表層のみならず、基層をも直接間接に巻き込んだのである。北部の内陸都市が、ヴェネツィアから輸入した原綿により、綿工業を発展させる一方で、良質原綿の産地シリアでは、綿工業が衰退し、原綿の輸出市場に転化した。このような「南北関係」的な構造は、イタリアの北と南のみならず、地中海全体をも巻き込んだようである。マシュリクは、11世紀には製品を輸出したが、15世紀には原料を輸出した。

ヴェネツィアには、ガレー商船が多く、国家が建造して、自国の商人に共同の輸送手段として提供した。多数の漕手により、安全だが多額の経費を必要としたので、胡椒、生糸、高級毛織物、などの高価軽量商品を積荷の中核とし、黒海から北海までの主要市場に向けて、目的地ごとに編成された船団が、詳細な規定の下に毎年定期的に航海した。ジェノヴァには、ガレー商船は少なかったが、私的な団体が建造した、ヴェネツィアにはない大型帆船があった。明礬、小麦、などの低価重量商品を中核として、やはり黒海から北海までの海域において、個々の商人集団が利害をもつ市場の間を航海した。両国を対比すればこうなるが、ヴェネツィアにも私的な団体の建造する多数の帆船があり、その多くは小麦、葡萄酒、などを積んで自由に航海したし、ジェノヴァ人がガレー商船で胡椒、染料、などを輸送することもあった。14世紀以降、ヴェネツィアは、新旧の有力者層が合体して出現した強力な商人貴族の支配の下に、国家の権力秩序が安定した。国家権力は、商業、海運、植民地にも介入し、その利害を保護し、運営を規制した。ジェノヴァは、新旧の有力者層が対立したまま、中下層も権力闘争に参加したので、権力秩序が安定せず、この混乱のなかから、特定地区に集住する有力家系を中核として隣人をも包摂する擬制大家族(アルベルゴ)が出現し、この擬制大家族同士の勢力均衡のうえに、脆弱な国家機構が成立した。ジェノヴァの商業、海運、植民地は、国家権力の介入が少なく、擬制大家族が単独あるいは連合して運営した(文献24)。ヴェネツィアでは、非市民が市民権をえる条件が厳しく、その有無による権利の格差が大きかったが、ジェノヴァでは、条件が緩く、格差は小さかった。おそらくこれが要因の一つとなり、ジェノヴァ人は、たとえば15世紀中葉以降のイベリアでのように、自己の利害に有利な現地社会と容易に同化した(文献25)。

4) 近世後期以後

ヴェネツィアは、イタリア北部に出現した領域国家に対抗するため、15世紀になると、従来の政策を転換し、本土に領域国家を形成しはじめた。16世紀には、トルコの海上進出により、海上商業への障害が増大し、海外小麦の輸入はしばしば危機におちいった。貴族たちは、危険が増大し、利潤が低下した商業、海運から資本を引き上げ、それを本土領域の土地の獲得と開発に向け、利潤が上昇した農業に投資した(文献26)。同世

紀末に、国産小麦が海外小麦の輸入を追い越し、17世紀には、国産小麦を輸出するまでになる。商人貴族は土地貴族に転化した。トスカーナ大公国でも、大同小異の現象がみられる。地中海商業の心臓部だったイタリアでは、17世紀の過程で、商業、海運、工業が急速に衰退し、農業の比重が増大した。黒海、東地中海の小麦は、制海権を喪失し、対価の減少したイタリア都市には流入しなくなり、人口が急増したイスタンブルなど、トルコ領土の都市に流入したのである。政治においても、以前の面影はなかった。15世紀に、イタリア政局を左右したのは、ローディの和約を締結したイタリアの五大国だった。16世紀に、それを左右するのは、スペインとフランスであり、地中海では、スペインとトルコが主勢力になった。17世紀になると、スペインは大西洋の覇権を喪失し、地中海でも撤退した。スペインと対立するイギリス、フランス、オランダが、(クレタをめぐるトルコと対立する)ヴェネツィア、(スペインに従属する)ジェノヴァを押し退けて、広大なトルコ領域との取引に進出した。さらに香辛料は、オランダが供給市場を掌握したので地中海には流入せず、流入するのはペルシアの生糸など、中央アジア産の商品だけになったが、18世紀になると、ペルシアの内乱、トルコ・ペルシア戦争によってこの流入が終焉し、上記三国のレヴァント商業ではトルコ領内の産物、とりわけ綿が重要な地位をしめるようになった。重要商品と内陸商路の変化にともない、東地中海の重要市場は、レヴァント(カイロ、アレppo)からアナトリア・バルカン(イズミール、テッサロニケ)に移動し、トルコの臣民のアルメニア人、ギリシア人が活躍した(文献27)。

マグリブでは、すでに17世紀以降、トルコ系の軍人が自立的な政権を樹立したが、18世紀にトルコ帝国が守勢にまわると、19世紀には、現地の政権や民族の独立志向の波が、次第に帝国の心臓部に接近しはじめた。一方、フランスは、19世紀前半に産業革命が進展したのを背景に、中葉以降マグリブを次々に植民地とした。イギリスは、19世紀末にオラービー革命を鎮圧し、インドへの通路エジプトを支配した。イタリアは、工業発展でも植民地獲得でも出遅れ、20世紀初めにトルコと戦争してリビアを植民地にした。ロシア・トルコ戦争(1877-78)と第一次大戦との敗戦を契機に、トルコの領土は縮小し、バルカンとマシユリクでは列強の干渉のもとに諸国が独立した。さらに、イギリス、フランス、イタリアの地中海における植民地、委任統治領でも、民族独立が趨勢となり、とりわけ第二次大戦を直接間接の契機として、そこでは諸国が次々に独立した。1962年には、苛烈な独立戦争の結果、アルジェリアがフランスより独立した。19世紀以降、地中海では、「北」が「南」を、あるいはキリスト教徒がムスリムを、経済的、さらには政治的に制覇し、支配した。しかし、「北」の内部をみれば、南西欧(イタリア、スペイン)は、西欧のなかでは経済力でも、政治力でも北西欧(イギリス、フランス)より劣位にあった。

第二次大戦後、アメリカの文化人類学者たちは、イタリア南部、シチリア、スペイン南部(アンダルシア)の調査を基盤に、近代化に遅れた「地中海世界」に共通する社会的特質なるものを指摘し、「地中海人類学」を提唱した(文献28)。名誉と恥の意識、擬制的親族関係、恩顧関係(クライアンティズム)、労働力の移動性。現在、地中海人類学のいう「地中海世界」は、社会類型の分析手段として「ヨーロッパ世界」や「イスラーム世界」より有効か、上記の社会的特質は過去の時代に対しても有効か、という視点から再検討を迫られている。しかし、この「地中海世界」は、政治において利用された。フランコのスペインは、北西欧から排除された結果、マグリブの独立運動、パレスティナ問題でフランス、イギリスと対立するアラブ諸国に接近したが、その過程で「地中海人類学」が利用されたのである(文献29)。その政治的利用は、これだけにはとどまらない。歴史学や文化人類学の「地中海世界」と、政治的イデオロギーとしての「地中海世界」、両者の関係もまた検討課題となる。

参考文献

- (1)濱下武志『沖縄入門』筑摩書房、2000年。
- (2)濱下武志「アジアの〈近代〉」『世界歴史』第20巻、岩波書店、1999年。

- (3) 齊藤寛海、第4、5、6章、北原敦編『(新版)イタリア史』、山川出版社、近刊予定。
- (4) 家島彦一「ピレンヌ・テーゼ再考ームスリム勢力の地中海進出とその影響ー」坂口昂吉編著『地中海世界と宗教』慶應通信株式会社、1989年。
- (5) 弓削達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977年。
- (6) アンリ・ピレンヌ、中村宏・佐々木克巳訳『ヨーロッパ世界の誕生ーマホメットとシャルルマーニュー』創文社、1960年。
- (7) フェルナン・ブローデル、浜名優美訳『地中海』全5巻、藤原書店、1991-1995年。
- (8) 岩波講座(新版)『世界歴史』全28巻+別巻1巻、岩波書店、1997-1999年。
- (9) 歴史学研究会編『地中海世界史』全5巻、青木書店、1999年-(刊行中)。
- (10) 岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」岩波『世界歴史』第13巻、1998年。
- (11) 関哲行「序」『地中海世界史』第4巻、青木書店、1999年。
- (12) 鈴木董「ブローデルの『地中海』と「イスラムの海」としての地中海の視点」川勝平太編『海から見た歴史』藤原書店、1996年。
- (13) 高山博「中世地中海における政治的変動と交易圏の変化」桜井万里子編著『西欧の歴史世界とコミュニケーション』(平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書)、東京大学大学院人文社会系研究科、2001年。
- (14) 森本公誠「イブン・ハルドゥーンと歴史の発見」『世界歴史』12、岩波書店、1999年。
- (15) 杉田英明「中世中東世界から見たヨーロッパ像」『世界歴史』12、岩波書店、1999年。
- (16) 稲葉隆政「ムスリム商人ディマシュキーの商業書について」坂口昂吉編著『地中海世界と宗教』慶應通信株式会社、1989年。
- (17) 風巻義孝『商品学の誕生』東洋経済新報社、1876年。
- (18) 湯川武「ユダヤ人と海ーゲニザ文書からー」『イスラム世界の人々』第4巻、東洋経済新報社、1984年。
- (19) C. McEvedy and R. Jones, Atlas of World Population History, London, 1978.
- (20) 齊藤寛海「中世末期におけるレヴァント貿易の構造」『西洋史学』第120号、1981年。
- (21) 齊藤寛海「中世ヨーロッパの貿易」『中世史講座』第11巻、学生社、1996年。
- (22) 齊藤寛海「アンコーナとラゲーザー16世紀のレヴァント商業ー」『イタリア学会誌』第35号、1986年。
- (23) 齊藤寛海「中世後期における地中海商業」『地中海世界史』第3巻、青木書店、1999年。
- (24) 永沼博道「中世末期ジェノヴァにおける『アルベルゴ』の生成」『関西大学商学論集』第32巻第3、4、5号、1986年。
- (25) 永沼博道「地中海から大西洋へ:ジェノヴァ人のイベリア半島植民」『関西大学商学論集』第34巻第5号、1989年。
- (26) 和栗珠理「1520-1570年におけるヴェネツィア人の土地所有ーアルヴィーゼ・コルナーロの活動と思想ー」『地中海学研究』第20号、1997年。
- (27) 深沢克巳「レヴァントのフランス商人」『地中海世界史』第3巻、青木書店、1999年。
- (28) 北村暁夫「序」『地中海世界史』第5巻、青木書店、1999年。
- (29) 中塚次郎「地中海的規範とアンダルシアの農民運動」『地中海世界史』第5巻、青木書店、1999年。

(2001年8月15日 受理)